

2015年1月23日 部門B研究会

(仮)再生可能エネルギーは「持続可能な観光」の実現を可能にするか？

—観光地の事例検討を通じて—

太田隆之

現段階の目次案

- 1.はじめに
- 2.観光への期待と懸念
- 3.「持続可能な観光」に立ちはだかる「観光のダイナミズム」
- 4.静岡県東伊豆地域の現状
- 5.長野県馬曲温泉からの示唆
- 6.再エネの導入は東伊豆地域の観光再生と「持続可能な観光」
- 7.おわりに

観光にかかる期待と懸念

先進国、途上国問わず、観光への期待は高まっている。UNWTOによると、観光経済は一貫して成長し続けており、今後も旅行者数及び彼らによる観光消費は増加し、地域発展と経済成長に寄与することが予想されている。日本においても、「観光立国」宣言以降、観光は成長産業の1つとみなされており、成長戦略の1つにも位置づけられてきた。

この背景には、観光は関連産業を広く有しており裾野が広く、かつ観光は地域固有財をベースに行われる活動であるから、地域においても取り組みやすい活動であることが考えられる。

他方で、成長し続けてきた観光関連の経済活動は、エネルギー消費量が増えて二酸化炭素排出量が増え、水利用量が増えることで生活や他の活動と水利用が競合する事態などを生んでいる。日本においても、主要観光関連産業である旅館・ホテル部門や旅客部門は従来から主要なエネルギー消費部門の1つであり続けた。

こうした状況において、国際機関をはじめ世界各国では更に「持続可能な観光」の実現を目指そうとしている。「持続可能な観光」とは、「持続可能な発展」概念を観光分野に取り入れた理念であり、経済発展・活性化、環境資源を含む観光資源の保全と維持、雇用創出と安定化、ジェンダーの改善、社会包摂などの観光分野特有の課題に同時に取り組みながら経済、社会の発展を促そうとする理念である。

「持続可能な観光」を実現するにあたって、UNWTOなどの機関は盛んにそのヒントも提示しながら、その実現を後押ししている。しかし、筆者は地域においてこれを実現する上で、観光には根本的な課題があると考えられる。

「持続可能な観光」に立ちはだかる「観光のダイナミズム」

観光には上述したように経済成長や地域発展に寄与することが期待される側面があり、これを観光が有する「陽」の部分だとすれば、「陰」にあたる部分もある。

まず、観光経済は観光客をはじめとする「外」の主体が行う経済活動に強く依存する。そして、これまでの観光研究から、観光需要は様々な要因により決まっており、観光地の主体がコントロールできるのはそう多くはない。これらの特徴と裾野が広い特徴などを加味すれば、観光振興が成功すればその果実

は地域に広くかつ多くもたらされるが、失敗すれば何の果実も得られず、それによるコスト負担をしなければならないということになる。

観光に認められる不安定性は、次の 2 つの時間軸から把握が試みられた。1 つは主に四季の変化などに認められる季節性、季節変動であり、もう 1 つはより中長期的な視点から把握しようとする「観光地のライフサイクル」仮説(Tourist Area Life Cycle, TALC)である。

季節性、季節変動とは、観光需要の季節性・季節変動とは、四季の変化のように年間等の比較的短期のタームで生じる需要の変化である。観光振興の文脈では概して季節変動を緩和すること、観光需要を均すことの必要性が主張されてきた。

TALC は地理学者である R.バトラーにより提示された仮説であり、現在に至るまでの観光研究の分野で検証され、この仮説が概ね妥当であることが共通に認識されてきた経緯がある。TALC は中、長期間にわたって生ずるダイナミズムであろう。

そして最後に、筆者は「観光のダイナミズム」に災害等の発生から受ける観光需要のインパクトも挙げたい。観光研究においては、かねてから政治的、社会的変動や戦争、災害の発生が観光需要を大きく減少させることが明らかにされてきた。この点について想起されるのは、2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災と、その後の福島原発事故の発生により、被災地ではない観光地を含め、日本全体で大きく観光需要が減少した出来事である。

静岡県東伊豆地域の現状

東伊豆地域は北から熱海市、伊東市、東伊豆町、河津町、下田市、南伊豆町の 3 市 3 町からなり、温暖な気候と温泉、海水浴場、花などを観光資源とした日本を代表する観光地の 1 つである。これらの地域では工業活動を主とする静岡県において、観光関連産業を主とする点で特異な地域となっている。

少なくとも 1990 年代後半以降、東伊豆地域を含む伊豆地域は観光経済が停滞することで、この地域の経済は静岡県内において一際低く推移してきた。これらの地域では観光に基づいた地域再生が喫緊の課題となって久しい。

この地域の観光の現状を確認する。まず、いずれの地域も季節変動を経験している。また、いずれの地域も TALC を経験していると考えられる。そして他の観光地同様、東伊豆地域においても、東日本大震災と福島原発事故による影響を強く受けた。

長野県馬曲温泉からの示唆

東伊豆地域において認められた事態に対し、再エネは観光の再生にどう寄与することができるであろうか。これを考える上で、筆者は以前検証した長野県木島平村の馬曲温泉の事例から示唆を抽出したい。

馬曲温泉は地域の「悲願」として 1980 年代に野天風呂として開設され、観光資源として地域を潤すことを期待されながら 1988 年に揚水量を増やすことを目的に小水力発電を導入し、今日まで小水力発電を活用して運営されている温泉である。

再エネの導入は東伊豆地域の観光再生と「持続可能な観光」に資するか

東伊豆地域を巡っては、再エネのポテンシャルが高いという指摘がある。「観光のダイナミズム」を経験している東伊豆地域において、再エネがもたらすインパクトを検討する。